

プロフィール

大学卒業後、在外公館派遣員としてナイジェリアで2年間、フィリピンで半年間勤務する。その後、国際協力 NGO である AAR Japan 「難民を助ける会」に入職し、タジキスタン、南スーダン、ケニアで7年間、東京本部で1年半勤務する。その後、大学院でアフリカ地域、主に南スーダンにおける紛争メカニズムについて学ぶ。大学院在学中に、ミッドキャリア・コースを受講し、大学院卒業と同時に、UNV に参加する。研修中は、パレスチナ難民を支援する UNRWA レバノン事務所に派遣され、Special Assistant to the Director of UNRWA Affairs, Lebanon (レバノン事務所長特別補佐官) として勤務。現在は、JPO として UNRWA ヨルダン事務所にて事務所長特別補佐官の職に就く。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

ミッドキャリア・コースを受講したことのある知り合いから、同コースは実践的で、有意義であったという話を、以前に聞いていました。私が受講した昨年度のコースでは、コミュニケーションとネゴシエーションに特化した内容であり、それまでの海外勤務の経験を通して、それらスキルの重要性は痛感していたので、応募しました。

応募した際は、コース内容に興味があり、また、その当時は、前職 AAR の休職制度を利用して大学院に通っていたため、コース終了後の UNV への参加は考えていませんでした。ただ、国際協力分野では、AAR での勤務経験しかなく、違う組織で試してみたいという気持ちもありました。そこで、最終的には、動くなら今だと思い、UNV に応募しました。なお、ミッドキャリア・コースの受講者は、国連での勤務経験者が大半で、同コースから UNV として実務研修に参加したのは、私が3人目だったようです。

2. 国内研修に参加した感想は？

研修項目であるコミュニケーションとネゴシエーション分野で実績を積まれた講師陣、また他の参加者も国連や NGO での経験豊富な方々でしたので、8日間と限られた日数ではありましたが、非常に有益な時間でした。

研修は、主にワークショップ形式で、スピーチや模擬記者会見を通して、講師陣、そして他の参加者から実践的なアドバイスを受けました。普段の会議での発言や質問の仕方、議事録の取り方にも直結しているテーマでしたので、現在でも頂いたアドバイスを実践しています。

3. UNV での活動について教えてください。

私は、パレスチナ難民を支援する国連パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA) のレバノン事務所に派遣され、レバノン所長を補佐する Special Assistant to the Director of UNRWA Affairs, Lebanon (レバノン事務所長特別補佐官) の任務に就きました。

仕事内容を大きく分けると、①事務所でのデスク業務、②難民キャンプへの訪問支援、③プロジェ

クト運営支援になります。

- ① 事務所でのデスク業務は、所長が参加する会議の議事録作成、またメモ（Talking point）やパワポ作り、所長決裁のために各部署から挙がってくる資料の確認などがありました。一つ例を挙げると、所長がドナー会合で UNRWA レバノン事務所の最新状況を報告する際、UNRWA の 4 本柱の活動（教育、保健、インフラ、救済・社会サービス）に関わる最新の数値、懸案事項、今後の見通しについて、担当部署から情報を入手し、発表資料を作成しました。

他にはコミュニケーション部が作成するプレスリリースの確認や、レバノン国内でのパレスチナ難民関連の報道記事を一覧に纏めて定期的に所長と共有しました。

- ② 難民キャンプへの訪問支援では、レバノン所長が同行する各国政府や現地大使館関係者のパレスチナ難民キャンプ訪問の際、その訪問に係る全体の調整をしました。具体的には訪問者の目的、関心に応じて、キャンプ地の選定からはじまり、キャンプ内のどの施設を訪問するか、メディアは招待するのか、特別な警備体制を敷く必要があるかなど、プロジェクト、コミュニケーション、セキュリティ部署の同僚と綿密に連絡を取りました。訪問者にパレスチナ難民の現状と課題、また UNRWA



スウェーデン皇太子の難民キャンプ訪問を終え、UNRWA レバノン事務所長、同僚、UNRWA の学校先生、そして皇太子との会談に参加してくれた生徒達と記念撮影

事業への理解を深めてもらうため、最適なキャンプ訪問の実施を心がけました。

- ③ プロジェクト運営支援では、日本政府助成の事業管理を行いました。これは当初予定されていた業務ではなかったのですが、日本政府担当の同僚が離任後、後任者が決まっておらず、私自身、プロジェクト関連の業務にも関わりたいという希望があったので、所長と相談の上、プロジェクト運営支援を行うドナー連携部の仕事も担当しました。

なお、プロジェクト担当と言っても、UNRWA は、教育部門には学校教師、保健部には医師、看護師を直接雇用し、各分野の専門家も配置されている組織ですので、ドナー連携部の主な仕事は、UNRWA のプロジェクト部とドナーを繋ぐ役割を担います。私の場合ですと、日本政府がレバノンで助成する UNRWA 事業の申請書や関連資料の作成、事業の進捗確認を行い、定期的に現地日本国大使館の担当の方々に報告を行っていました。

4. UNV での感想は？一番印象に残っていることは？

まず仕事での充実度は、「何の仕事をするか」、そして「誰と仕事をするか」が大きな要素になると思います。まず、一つ目の「何の仕事をするか」について、上述したとおり、資料作りから、キャンプの訪問支援、そしてプロジェクト形成や報告など、多岐にわたる業務に携わることができたと感じています。また、所長室での勤務を通して、組織のマネージメント・チームがどのよ

うに意思決定をするのか、その結果をどのように分析し、今後の対応を考えるかなど、所長室に配属されたからこそ見聞きすることができ、貴重な学びの機会でした。

そして二つ目の要素の「誰と仕事をするか」について、一番近い同僚が、所長室のメンバー、つまり事務所長と、彼の秘書でしたが、両名とも人として、またプロフェッショナル（仕事人）としても非常に魅力的であり、能力の高い方々でした。私の前任者と私の赴任に少し時間が空いていたこともあり、赴任直後は、私が担当する仕事はないのではと感ずることがありましたが、結果的には、色んな仕事を任せてもらい、経験になるとともに、人間的に尊敬できる人たちに恵まれて、本当に幸運だったと感じています。

他の同僚についても、“所長”補佐官という肩書きが効いていたと思うのですが、こちらからの問い合わせに対しては、スピーディーに対応してくれ、ドナー連携部の同僚からも、ドナーへの報告書の作成方法含めて、適宜助言を与えてくれ、ストレスフリーな職場環境でした。また、日本国大使館の方々とも定期的に連絡を取る機会がありましたが、経済協力班の方々をはじめ、大使館の方々には非常に良くして頂きました。

一つ、能力面について、今更ですが、自分の英語レベルは、まだまだだと日々感じました。所長のように英、仏、アラビア、そして母語であるイタリア語を、全て通訳なしで対応出来る人材は、この業界広しとは言え、そう多くはないと思うのですが、同僚の国際職員に限っても、業務上の大前提となる英語の能力は、非常に高いと感じました。論理的且つ端的に英語で説明する能力です。他方で、自分が担当する業務の優先順位を把握し、必要に応じて上司、同僚に意見、助言を求めつつ、各業務の提出期限を守るなど、社会人として、しっかりとした姿勢で取り組み、対応できることも分かりました。

印象に残っていることですが、「パレスチナ難民の人たちの声」です。業務の一貫である難民キャンプの訪問支援では、実際にキャンプに住んでいる難民の人たちからキャンプでの生活、レバノンで難民として暮らす上でのチャレンジについて、訪問者である各国大使館の方々などに話をしてもらう時間を設けていました。例えば、その話の中で、シリア紛争によって、シリアからレバノンに避難し、二重難民となったパレスチナ女性は、シリア紛争の最中、夫は行方不明になってしまった。レバノンでは生活が非常に厳しいが、シリアに帰還することも出来ないと思痛な思いを聞きました。また、レバノンで生まれ育った多くのパレスチナ難民の若者から、就職活動中、内定をもらっても、パレスチナ難民だと分かると、内定を取り消されたという話を何度も耳にしました。

レバノン国内のパレスチナ難民の就業者の半数は日雇い労働。若者の70%以上が貧困状態であり、シリアから逃れてきたパレスチナ難民（二重難民）においては貧困の割合が90%を超えるという現実、統計として理解していても、実際に彼らが直面している就業や生活面での諸権利の問題を見聞きすることを通じて、この仕事の意義、そしてやりがいを実感していました。



ベイルート市内に位置するパレスチナ難民キャンプ

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

2019年3月下旬からJPOでUNRWAヨルダン事務所に派遣され、事務所長特別補佐官として勤務しています。パレスチナ難民と一言で言っても、居住国・地域によって、法的位置づけや支援の状況は様々です。現地の状況を正確に把握し、事務所長や同僚に的確なサポートを提供出来るように心がけています。引き続き、国際機関での経験を積み、情勢や人々のニーズが刻々と変化する人道支援の現場で貢献できる能力を身につけたいと考えています。

6. 事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

UNVでの実務経験の機会を提供している本事業は、特に将来、国際機関での就職を考えられている方にとっては、国際協力分野での業務、そして国連での勤務を同時に経験できる非常に魅力的な制度だと思います。もし、参加を迷っている方がいれば、まずは行動してみて、それから考えるのも一案かと思います。